



構造的限界を越えるPCRTの力

腰椎分離症（終末期）の中学2年生バスケット選手が完全復帰した軌跡

報告者：倉持怜史（接骨院くら）

症例：14歳 女性（栃木県選抜バスケットボール選手）

患者情報と初期状態



中学2年生
女性（バスケットボール部・
クラブチーム兼任）



主訴：1年前からの腰痛・臀部痛
（試合は1分も持たない）

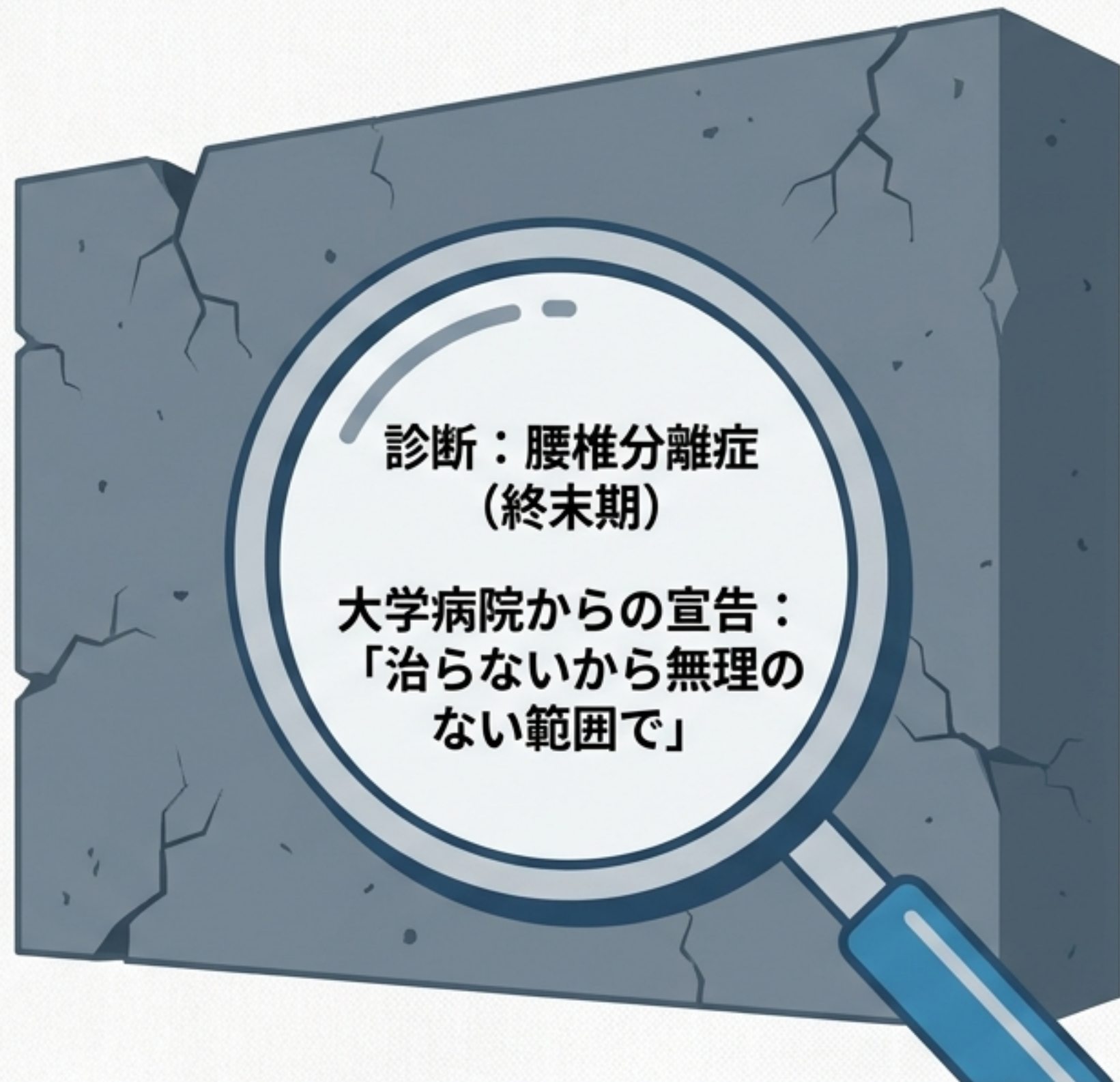
NRS:



予期不安:





CGI-S:



インサイト：患者・父親ともに改善を諦めていた。
既存の「構造論」ではここで行き止まりとなる。

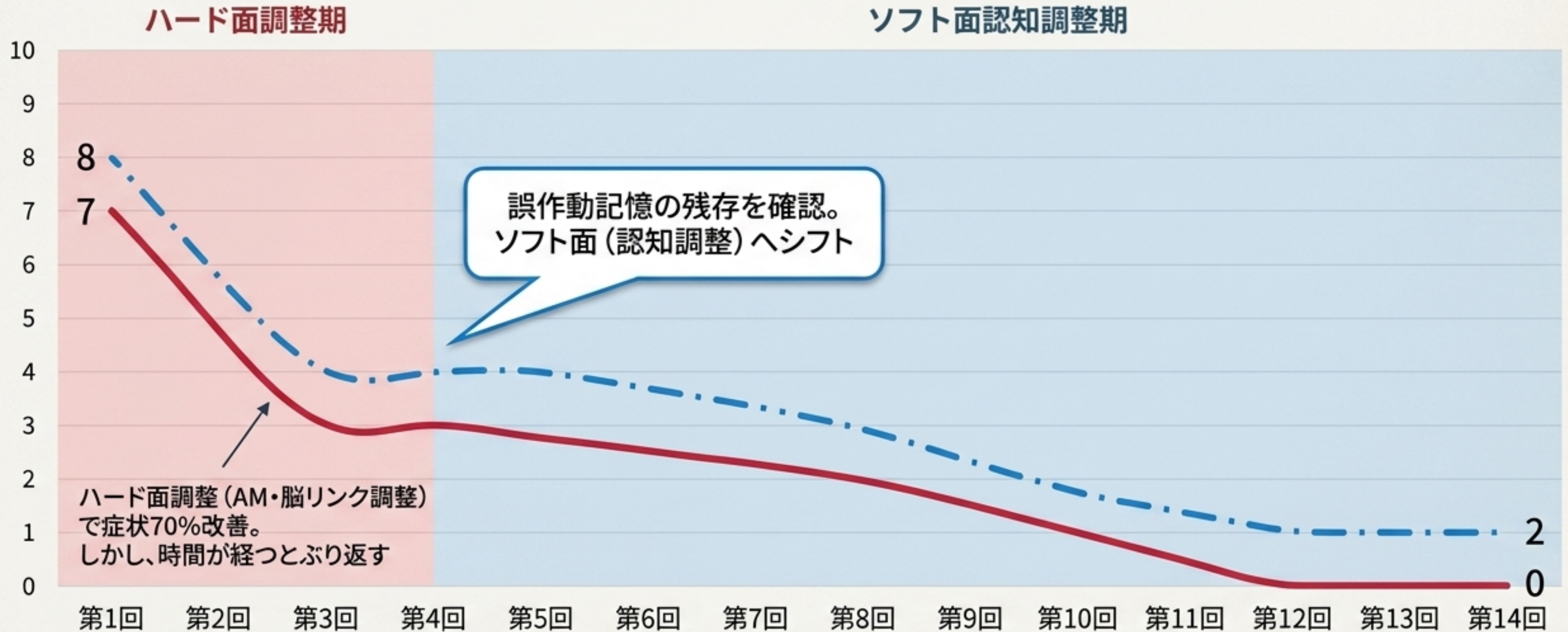
パラダイムの転換

構造論的思考 (既存医療)	有機生命論的思考 (PCRT)	
骨の分離が痛みの原因	視点	痛みの出所は心身の「誤作動記憶」
骨はくっつかない = 治らない	限界	分離した骨は治らなくても、 痛みは改善する
諦め・パフォーマンス低下	結果	希望・パフォーマンス向上



初回での治療コンセプトの丁寧な説明が、患者の「目の輝き」を取り戻す第一歩となった。

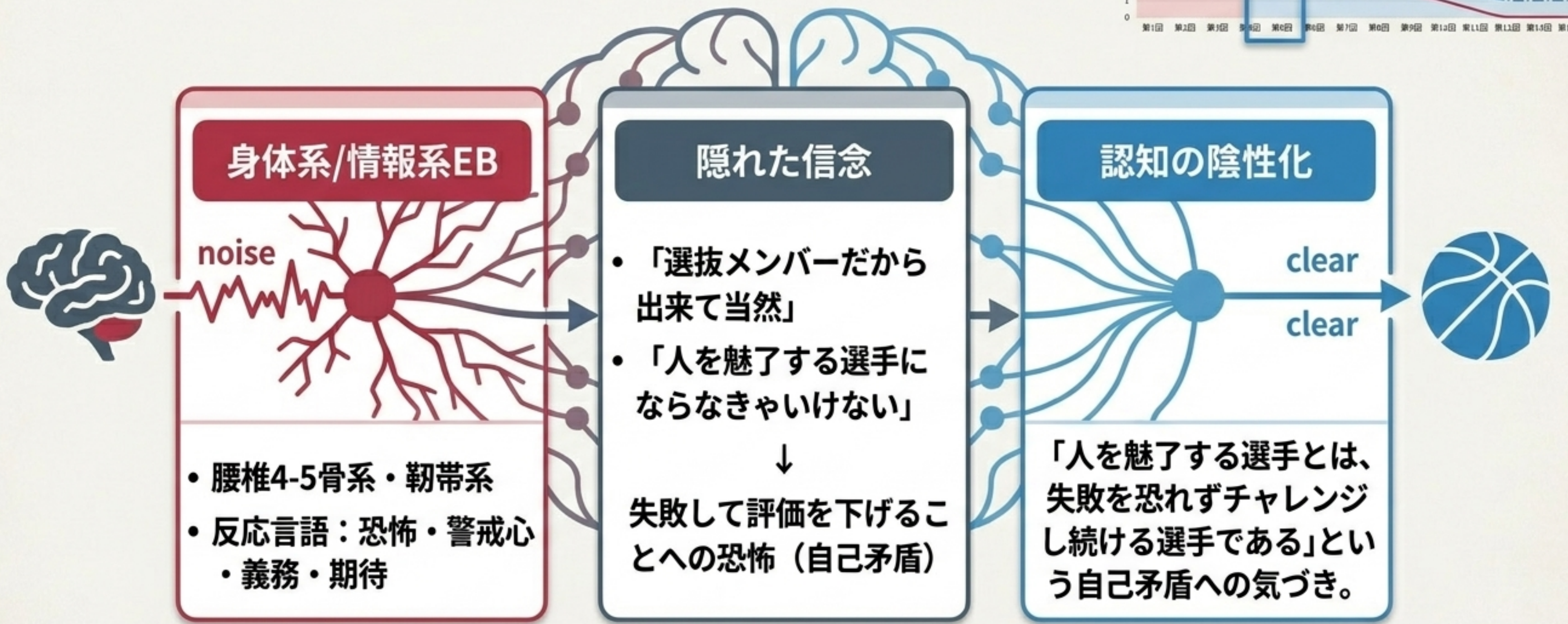
The Signal Tracker



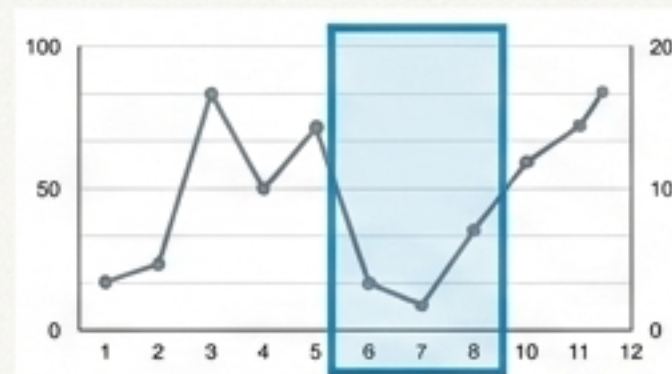
症状の「戻り」こそが、情報系（ソフト面）へのアプローチを要求する明確なサインである。



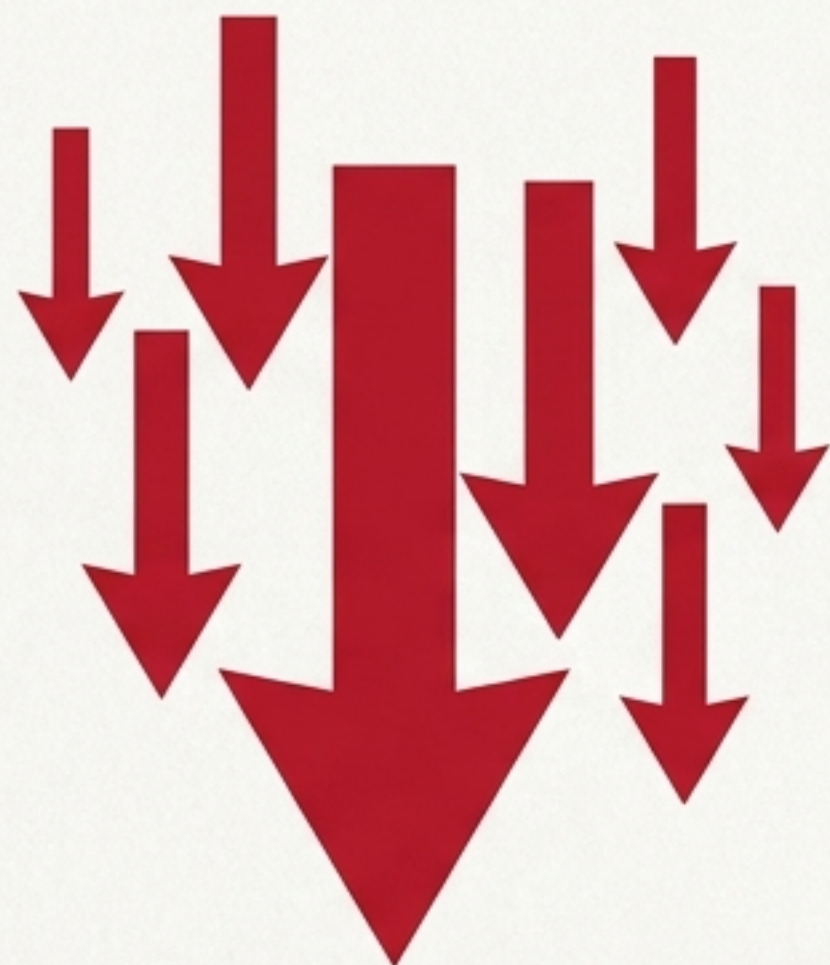
ターニングポイント①：他者評価の呪縛



ターニングポイント②：キャプテンの重圧



第8回・第12回



ストレスイメージ

- ・ 監督・コーチからの厳しい怒声
- ・ 選考会での弱気な自分への苛立ち
- ・ 反応言語：復讐心・忠誠心

PCRTの宿題

課題：「キャプテンになって得られることは何か？」

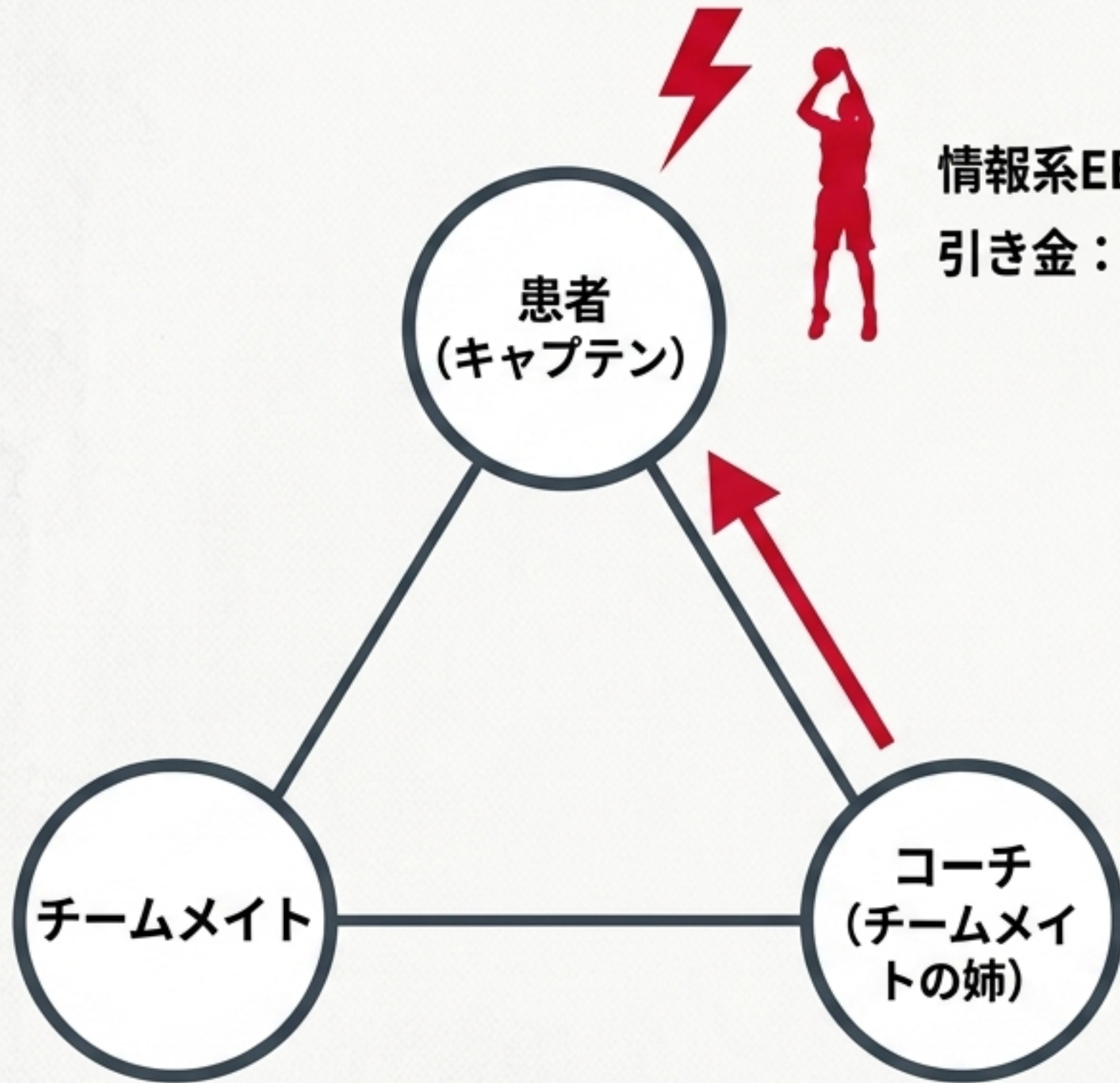
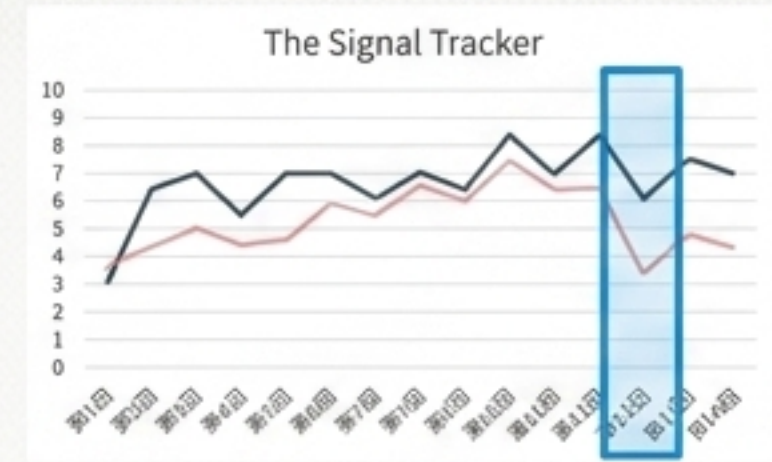
自己変容による陰性化

患者自身の回答：

- ① 忍耐力が高まる
- ② 人前で発言できるようになる
- ③ 心に余裕が出る

→ 視点の変容により日常レベルでの誤作動記憶が解除

ターニングポイント③：対人関係のモヤモヤ



情報系EB：ツーハンドシュート イメージ + 猜疑心

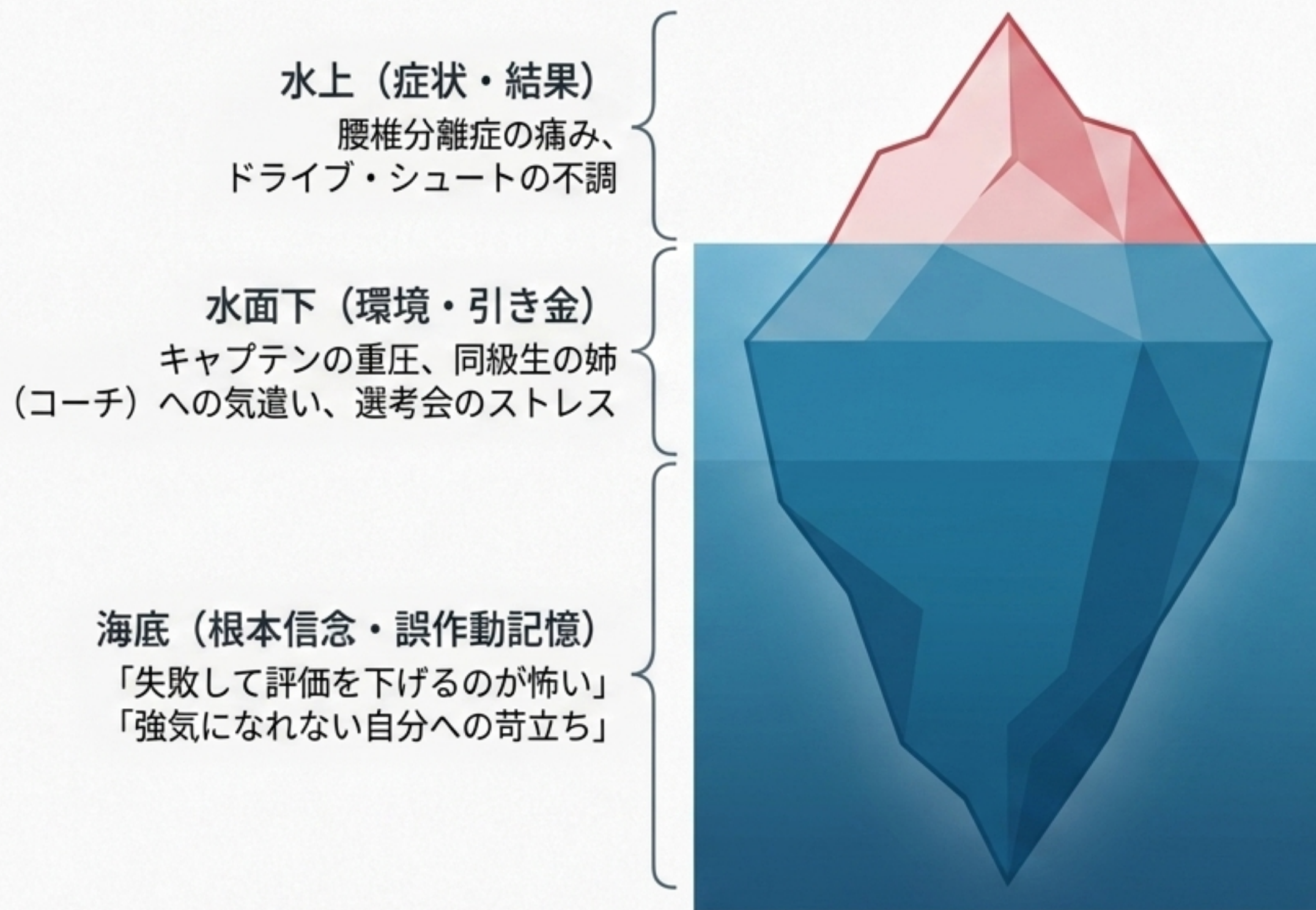
引き金：「コーチが妹に直接言わず、わざわざ自分に伝えてくる」

✓ 認知調整のプロセス

課題：「コーチの意図を考える」

結果：コーチの視点（チーム全体への配慮）を理解したことでモヤモヤ（猜疑心）が消失。直後にシュート成功率が向上。

誤作動記憶の構造 (シンセシス)



Insight: PCRTの真価は、水上の「結果」を追うのではなく、海底にある「信念」を変容させることにある。

最終結果とパフォーマンスの向上

✓ Quantitative Results

通院期間：13回（約4ヶ月）

NRS：7 → 0（完治）

予期不安：8 → 1

✨ Qualitative Results

- パフォーマンス向上：シュート成功率の上昇、ドライブの質の向上。
- メンタルの成長：「逃げないで、チャレンジする」という強い精神力の獲得。





01

器質的变化（腰椎分離症）が存在しても、慢性的な痛みの主体は「誤作動記憶」である可能性が高い。

02

患者の日常の解釈（信念）を変容させることが、ハード面の限界を突破する最良の治療となる。

03

心と体を一体として捉える「有機生命論的アプローチ」こそが、絶望した患者に真の希望を与える。